

No. 58

1992・1

発行 高知県国民休暇県局  
自然保護課  
高知市丸ノ内1-2-20  
TEL 23-9610

# 土佐の自然



工石山とキシツツジ

## 目次

◇シリーズ

おらんくの自然

—その1— 土佐山村編

土佐山村の自然と歴史

和田 一本

高知県の里山の野鳥

(一九八九年五月—一九九〇年五月)

田中 正晴

工石山の昔と今

山崎 清憲

上佐山村の植物

稲垣 典年

土佐山村の洞穴を訪ねて

川澤 哲夫

工石山の登山と沢登り

国沢 鎮雄

工石山県民の森設定のいきさつ

桜井 祥一

## 編集委員

県自然環境保全審議会委員

甲藤 次郎

山崎 清憲

山脇 哲臣

県山岳連盟会長

国沢 鎮雄

## 土佐山村の自然と歴史

## 和田 一本

村の起源と、村に人間が住みつき、そして集落が何時頃形成されたのか、確たる記録がないので不明である。ただ今日に至るまでの事柄について、県内にある資料や、各分野に亘るそれぞれの研究者の文献を資料として、大雑把に述べてみると、

## 地勢

村は、北方に、四国山脈より分岐した工石山連峰と、南に、高知市の北山連山に挟まれた峡谷型の村で、工石山を源流とする高川川と、東方高尻木山より流れる梶谷川、もう一つ東方、久礼野、重倉、正蓮寺より流れる重倉川、清水川が合流し、長谷川となって、これらが村中心の平石で合流し鏡川の本流をなしている。村の面積は五九・四二平方キロ、東西一・四キロ、南北九・一八キロで、うち、林野率が九〇%余を占め、耕地は僅かに十%に満たない寒村と云うに等しい村況である。

さて、村と人とのかわりについて、まず、村の東部にある、菖蒲洞(県指定の天然記念物)の上段の初平ヶ岩屋より弥生式土器や、獣骨が発見されたことに

より(龍河洞のものと同じ品であるという)、恐らくこの時代に狩猟等を業とするごく少数の人々が石灰岩の洞窟にすんでいたものと想像されるが、永く定着して集落を形成したわけではなく、所謂流浪民の仮住居と思われる。此の時代前後の四国の最も古い遺跡(原始古代)と考へ合わせてみると面白い。それは、

○上佐村田井の玉屋敷及八田坪遺跡

○高知市久万、久礼野、鴻森、初月、愛宕山等には弥生式文化の後期から末期時代にかけて銅鐸、石包丁、土器、石斧その他の遺物が出土し、古代人が住居していた。

○上佐村上居須磨山から銅鐸が発見され弥生式文化の後期と推定されている。

○奈良、平安時代の遺跡

○蓮台寺跡

○三谷山清水寺(弘法寺)跡

○弘法寺千手院(真言宗)

○本尊 葉師 (弘法大師作)

古書によると、土佐山郷三谷山に大同元年(八〇六年)天城天皇が坂上田村麻呂に勅して大悲の道場として造営せしめた(観音堂坊金十一坊)これは京都の清

水寺と同じもので、初めは清水寺といっていた。三谷山は、小坂峠から近く、古代の遺跡もあり、昔から拓けた愛宕山附近から遠くないので、ここに寺が出来たものと思われるが、この当時(八〇〇年代)ここ以北の現在の土佐山村内に集落が出来ていたとは思われない。恐らく当時は、全村原始林に覆われた。前人未踏の深山であったに違いない。後世一宮神社や、高坂城の建築材の資源をここら辺りから伐出したのではないだろうか(一宮神社、雄略天皇、四年、五六五年)。

以上から考察すれば、村に集落が形成されたのは、かなり後年である。

鎌倉時代に、当時鎌倉幕府最初の侍所の別当たる和田義盛が戦いやぶれ(一二二三年)三男義直(のち義則)は残兵二千名を率いて、和田氏の氏神子守大神と和田一門の軍神弓矢八幡大神を背負、建保元年(一二二三年)、妹照代姫を連れ四国の讃岐に下着、七年後貞応二年十一月(一二三二年)土佐郡土佐町高野の山中に入国し、地名を和田村と改め、八幡宮や、子守神社を建てている。義則はのち、子孫を分離させ県内各地に和田一族の繁栄を図った。村へ和田一族が何時頃入ってきたのかは判らないが、その当時は既に集落が形成されていたのではないだろうか、村への入国経路は、北の山越で(恐らく東川部落奥の小坊子辺りで

は)久万川地区へ。この地区は、和田姓が多く又子守神社がある。久万川から地区上方の杖の本峠越えて桑尾地区へ、地区の奥から順次下へ和田姓が(昔は十数軒あった)あり、村の和田家の大先祖の祠が桑尾上奈路に在り、その碑に元禄十年六月二十一日(一六九七年)とある。又此の時代に、村へ入国している坂本家の家譜によれば、当初鎌倉で浪人していたが、土佐に由緒ある者を頼り入国し、土佐山郷の桑尾に住んだとある。長宗我部元親に仕え、後山内藩に仕え、数々の功績あり明治に士族に列せられているが、六代坂本寿之助勝吉は、禄高一九六石余となり、文政年間(一八二〇年)の「土佐藩郷土録」に載っている。前記和田家の記録によって、既に上佐山には集落があった事は確かである。集落形成の中で、地区によって姓が纏っている事から察しても、かなり古くから人々が住みついたであろう。主な集落を上げてみると、東川地区では、筒井、森姓、久万川では、和田姓、綱川では伊東姓、都積と桑尾では、和田姓、高川では高橋姓、日之浦では山本姓、長谷では永野姓、が多く、村全体から見ても、昭和十七年には、高橋九七戸、和田九三戸、永野六九戸、山本三七戸、伊東二四戸、田中二三戸、以下省略するとしても、人が住みついて集落形成するまで千年以上の年月を要してい

るものと思う。

## 文化の発達

上佐山の住民や文化がどちらの方向から転流してきたかと言う事を考えると、先の坂本家の入村、和田家の入村によってその時代は大体判るが、その他の住民の入村径路がさだかでない。しかし村の地勢や、接界する近郷の文化等を考察すると、恐らく古くから開けていた、久乃初月、愛宕、一宮、久礼野の方面から、小坂峠、三谷山を経た径路が主なるものではないか、前述の四圍の地域は、資料も豊富で、可能性が高いし、又中世以後においては四国の背梁山脈（四国山脈）は文化交流の障害となっていなかった。寿永年間（一一八二―三年後）平氏が壇ノ浦に滅びて、土佐の山間をさまよった時代、都から土佐へ来る国司や配流者は、阿波、讃岐、伊予から幡多路を大迂回したことや、後には立川、津野山、野根山越しに来る縦断線があり、瀬戸内との往来も容易であったから、四国の山々の方向から人の往来も繁く、又これにより集落ができたことも考えられる。前述の四開からの径路は、山内藩政時代より明治の頃にかけて、鏡村よりは、大和弘瀬の径路、円行寺から仏生峠越え、三谷から推野峠越えで都積桑尾下り付えと、長谷へ来る径路、秦泉寺からは望麓峠越え清水川を経て鏡川上流沿いに中央へと、望

麓峠越え七ッ淵へ降り口の浦へ出る径路、一宮からは、薊野を登り、法徑堂を経て久礼野から西川、菖蒲に入る径路、東は上倉から蟹越を越え菖蒲に入る径路、嶺北からは土佐町溜井、伊勢川を中ノ川へ越え大改野に出て上倉に至り高尻木山麓を廻り菖蒲に至る径路、土佐町相川より檉山峠越え城に出て高川に入る径路と地蔵寺より立割を経て赤良木峠越えで城より高川に入る径路、西部では、土佐町西石原から小坊子峠越えで東川、中切に入る径路が出来ていた。これらはいずれも人馬牛道で大八車が通れる様なものではなかった筈である。明治時代になって、和田嘉八なる者が私財を投じて城より平石を経て小坂峠より秦泉寺に至る道路を開設したことは、役場東に建っている記念碑で明かである。村人の生業は、昔は恐らくこの山村とも同じように焼畑農業で、ヒエ、アワ、トウモロコシを食していたと考えられ、米が食される様になったのは、中世以後ではなからうか、長宗我部地検帖には水田が出ているのを見ても判る。山内時代に入り、緒方宗哲の著による土州郡士（宝永時代一七〇四―一〇頃五代藩主山内豊房公が命じて上佐風上記を撰せしむとあり、これが郡志かどうか確証は出来ないが、内容から推して緒方宗哲の編するものと思うと平尾道雄氏は述べている。）によると、村に関する記述の最後に、上産として、茶茅が記されており、これが土佐山郷が屈出した産業の主なものであったと思う。近代に入ってからは、先に述べた径路により村人は、高知城下へ、薪や木炭、四季の山菜や、茶、障子紙などを籠やオークに掛けて商いに出て、夕暮れ近く城下の日用雑貨を土産に帰ってきている。

明治に入ってから、全村農業を主業としており、その主なる物は、製炭、製紙原料の三極、楮の栽培、養蚕、林業等をもって貨幣経済の手段とし、昼はひねもす谷に降り、山に上がり、石砂の土を打ち、木を曳き、夜はよもすがら炉辺にランプの明かりで細々しい夜なべの仕事に太古以来の凝縮した生活を守りつけていた。此の頃、明治五年後の村は十ヶ村あり、菖蒲村七五戸、三三四人、西川村三四戸、一四六人、梶谷村八三戸、三六一人、長谷村五五戸、二二二人、高川村七二戸、二一九人、桑尾村八三戸、四一六人、都積村五八戸、三五七人、網川村八九戸、三八三人、弘瀬村一〇三戸、四四四人、東川村一五〇戸、六八六人、中切村七二戸、三三二人で合計八七二戸、三八九〇人住んでいた。現在は戸数人口共、その半数にも足りない過疎の村となっている。

土佐山村には各地区（十四地区）に産土神なる神社があるが、棟札による最も古き神社は、桑尾地区の氏神である仁井田神社である。永禄三年（一五六〇年）祭神未詳となっているが、大山祇神社外三社合祭となっている。各地区の神社においても、それぞれに合祭されている神社がある。

本村で特筆すべき神社は、村の中央に（平石地区）在る御霊神社である。これが由緒記録によると、旧郷社で、祭神未詳となっているが、「或云吉備公崇徳天皇、伊予親王、藤原夫人橘大夫文大夫火雷天神」とあり、

由緒として

勸請年月縁起沿革等未詳古来ヨリ当村ノ中、三谷村、弘瀬村、桑尾村、梶谷村、西川村、都網村、（元都積村、網川村、両村明治初年合併シテ都網村ト称ス）重倉村、中切村、東川村、菖蒲村、高川村、及当村（中古長谷村）十二ヶ村ノ総鎮守ニシテ元ト御霊大明神ト称ス明治元年辰三月改称ノ達示ニヨリ御霊神社ト改称ス五年新ニ社格ヲ定メラルルニ当リ郷社ニ列ス天正十八年再建日記アリ鰐口銘曰応永二十一年十一月廿日寄附上州吾川郡西光寺棟礼文曰大永八年戊子五日再営本山右近將監享保三年十二月鳥居寄附桑尾宗松元龜三年中三月十一日正遷宮神主弘瀬次郎左衛門是長宗我部奏元親公ノ再建ナ

## 村の文化財と自然

主なる神社仏閣

り此以後再常用材ノ為メ社地ニ檜杉五百本ヲ植付当社再建ヨリ外ハ不可伐採時ハ子孫ヲ可斷代官久武肥後守神主弘瀬次郎左衛門尉ト棟札ニ記載アリ旧社領土佐山郷村々ニ御靈分ト大正年中奏氏ノ檢地帳ニアリ祭典ノ用度古米ハ皆大庄屋ノ作配ニシテ下社人十八人奉仕シ祭札ノ節ノ役配坐列ノ次第悉ク古式アリ正徳二年九月大庄屋三谷清助ノ右記スルモノ今猶在ス神社帳ニ旧平石御靈大明神(一)二御靈大明神、大宮)右勤請未歴不桐知古米有之上佐山郷中惣社也、以下神社の建築面積、敷地、社領地の加治子、祭札時の方式、神社に関わる方々の事について詳細に記録あるもかなり長文であるので以下省略するが、前述した様に、本社社地に植栽されている杉檜の伐採云々は奇異に思うかもしれないが、過去に二、三この神意に触れ死亡したと思われる者がいた。桑尾地区に在る春宮神社は、棟札では、天保十年(一八三九年)とあり、祭神不詳で、旧称春宮大明神と言う。此の神社には拝殿上に菊の紋があり、昔皇族の姫が病を得て此の地に住むうち病没し、これを祀つたものといわれる。当地区の神職であった村井春長氏の蔵書によれば、寿永年間(一一八三年)皇族の姫若が皮膚病に罹り、その為、都より辺地の上地へ身を隠す事となり、お側付の、白山と、医者者の喜成と、下女のお龍の二人を連れ

て「うつる船(くり船)」で土佐に着き、この上佐山村の占味と言う所まで来た。上地の者は、この四人をお迎えした。その所が今、大向と言う宇地名で残っている。そして桑尾川を遡り、今の横平(昔は此の地を、昔の京の都の淀川にちなんで淀平と言っていた)に到着したが、其のうち、春の宮姫も薨じ、二臣も崩死し、下女一人残って、お墓所に「しめ」を引き祭事を行っていた。白山と喜成の墓は、神社下にあり、下女お龍にちなんで、今は村道になっているが、神社下方に「ハイタツ」と言う地がある。此の神様は、皮膚病、ハレモノに関して、願かければ非常に効能ありと言われ明治時代は参拝者が多く旧正六七日の祭事には大賑賑であった。今でも願掛けの人が訪れている。都積地区に、御山所権現様が在る。この権現様は断崖の中腹の岩窟内に鎮座し、庭の広さが、畳三十枚位は敷ける広さで、祭日は旧暦の十七日で、今も参拝者がある。明治年間の頃、吾川郡弘岡村の中山左吉なる者が病気で高知の有名な医者の手当を受け小康に向かっていたが、再発し、最早や全快不可能と言う事で、この権現様にお願込めお通夜中、不思議や左吉の体調が急に良くなり、一同にこの事を話したところ、これは権現の御利益と一同感涙にむせんだと言う。その後左吉氏は天寿を全うして、死去するまで

御縁日には必ず御札詣りを欠かした事がなく、死去後は実弟の中山馬次氏が必ずお詣りに来ていたと言う事である。(村民館報による)。  
この神社の裏に鍾乳洞があり、穴は垂直に十数メートルの所で崩壊して詰まっているが、その昔、この穴は下方の鏡川の古味と言う所の「コデ淵」の風穴(鍾乳洞)に通じていて、昔人早魃の時、上からこの穴を抜けコデ淵の水を汲んでいたと言う話もある。この風穴は川岸より上方へ数百メートル延びており、途中で大きな石が詰まっているが、これをなんどか取り除けば(詰まった所を見上げる地点は広い)或いは権現へ通ずる穴が開発されるかも知れない。穴は鍾乳石も多くあつたが、何時の間か、誰か持ち去つた形跡があるものもまだ多く残っていて、開発の余地が充分ある。  
**山姥の瀧とゴトゴト石**  
ヤマンバ(山姥)は、八町四方の森林のあるタキ(断崖)に棲み老婆姿をした妖物とされていて、飛ぶこともできるものと云われている。桑尾地区の上地上に山姥ノ滝というのがあり、高さ二十メートル余もある滝の中間の岩屋のあたりに石籠のようなものが二ヶ所のこざれていて、伝説ではあるが、昔この地区の某なる者、この近くに稗畑を二セマチ持っている、この稗畑は毎年豊作つづきで、刈つ

ても刈つてもすぐに穂が出て刈尽くすことができず、家連も不思議に繁昌する方であった。当主はその稗畑の不思議さに恐れをなしてこれに火をつけたところ、畑の中から老婆姿のものが半焼きになりながら滝の上の方に向かって飛んでゆくのが見え、それからこの家は急に落魄して家産を失ってしまった。(桂井和雄著土佐山民俗誌より)  
この滝は、下方にあるゴトゴト石と共に春夏秋冬景色もよく、山の神への参拝を兼ねて観光に訪れる者も多い。尚、ゴトゴト石は、重さ数百トンの平石の上端にボツンと乗っかっている五トンの小岩であるが、これが昔は小指一本で前後に大きく動いていた(今は両手でなければ動かない)不思議な石で、それが又絶対に落ちないのも不思議である。昔は力じまんの若者や力士が挑戦しようである。最近では観光の名所になりつつあり、受験生や選挙に出る人達が落ちない石にあやかるうと、よく訪ねるようだ。  
**神社の神事弘瀬の**  
**仁井田神社のオナバレ**  
弘瀬地区の氏神仁井田神社の秋神事にオナバレと、そのお旅所での棒使い、碁盤振り、獅子舞など、今に受け継がれている。このオナバレの古式順序は、鼻面、獅子舞、挟箱、ねり子、碁盤、相撲、御弓、御鉄砲、御刀、御鷹、亀台、烏毛、

白熊、白笠、立傘、唐櫃、金幣、大幣、白妙、大神、神職、御輿、御馬、区長、氏子惣代、青年団、学校職員児童、氏子一同、昔は神主につづいて組惣代、宮惣代、鍵主（宮守）などが、文字笠に功草鞋、礼服用で古式を守って供奉していたものである。現在でも、完全ではないが、この古式が守り継がれている。お旅所になっている校庭（今は校舎は無く校庭は一部駐車場となっている）で行われる行事の中で珍しいのは、先ず棒使いである。村童と小若い衆の二人づつを一組にして、十数組が横に並び、花に結んだ白樺白鉢巻の装いで木太刀と棒で太刀打ちの種々の型を激しく演ずる。その双方の掛け声はエッヤッホウと呼び、打ち掛かる場合には「参る参る」と呼びかけて、一月余にわたる夜々の練習の激しさが見える。基盤振りは、道化面や粉装した顔の若い衆たちが、村の乙女たちのどつという笑いの中で小刻みな調子の太鼓の音に合わせて、色紙を貼った中空の基盤に柄をつけたものを打ち振り、一様に珍妙な踊りをつづける。獅子舞は基盤振りの若い衆ら数名が帯を握りあって一列になり、先頭の者が木太刀を振り上げて、これも同じ太鼓の調子に合わせて腰を振り、こっけいな所作を繰り返しつつ眠る獅子に近づき、眠醒めて立ち上がる獅子と共に踊り狂うのである。そして、この頃に

なると、峡谷は夕暮れて、神輿はあわただしく行列を整えて神殿に帰らねばならなくなる。

### 高川の仁井田神社の早飯喰い

高川部落にある氏神の秋神事は、十一月八日に先立つ三日前すなわち五日を「小口開け」と呼んで、この日から神社に大幟を上げ、トウガシラ（当頭）の家に区長、区長代理、神社総代三人、当人五人らが集まり、床の間に神酒をあげて酒宴を開く。七日の日にも同じく神社総代および当人らの八人が当頭の家を集まって酒宴を開き、これを「大口開け」と呼んでこの日特定の皿鉢料理としてハツ（鮪）の刺身と、結び萋蕪、たたき、牛蒡を出さねばならぬことにしている。なお、この酒宴には酒の果てる頃を見はからって、特にハツの皮の焼いたものと、焦げた飯をヤマカゲと呼んで出すことが規定されており、これが出ると散会することになっている。昔は、この日神田より収穫した米で作った濁酒を氏子一同が集まって飲みあったと言ひ、又、社殿では宵祭として能楽による神楽があったとのことであるが、今は古式をつたえるものもなく廃滅している。

### 八日の本祭は、先ず大夫の開扉、供餅

祓、降神、祝詞があり、それより大夫は神殿内の金幣（長さ三尺許の幣の先に多数の小鈴のついたもの）を持ち出してき

てこれを羽織袴姿の当頭に渡すと、当頭はこれを奉持社殿内に拝座する氏子の頭上を鳴らして廻り、大夫にもどして神殿に返す。それより氏子一同に神酒が酌んで廻され、これがすむと八人の当人の世話で、一戸一人づつ列座する青年男子らの前に飯を盛った木椀と木の葉に盛った少量の焼味噌が白木の膳に載せられて出され、「膳部が出ましたきおあがり下さい」という席配（当人中の膳部係）の挨拶があるや否や、一同時刻を競うように故意に早く飯をかき食い、その間一同は、湯々、茶々、味噌、飯などと連呼して八人の当人らをせきたてて代わりを求め、女子供たちの笑いのさざめく中に食べ終わるのである。この行事に出す飯は、米を洗わず糖のついたままで故意に釜にこげつかして炊き上げ、飲み湯はこのこげ飯を出した大釜を洗わずに水を入れ、白く濁ったものを湯に沸かして出すことになっている。この行事は昔の軍立ちの風を遺したものであると言われている。以上、オナバレと早飯喰い、の行事記は桂井和雄の土佐山民俗誌による。

### 山嶽社

藩政時代から土佐では、上士、下士を問わず侍たちが、智を研き人格を修養し武士道を体得しようと、それぞれ気の合う同志が集団をつくって、互いに鍛練しあった。明治になって、経済的に地位の

向上した旧郷土や地主階級の子弟も参加して、ぞくぞくと結社が誕生し、明治七年（一八七四年）四月十日の立志社の設立を頂点として郡部の町村まで及んだ。この影響を受けて、上佐山村西川部落では、先ず夜学会ができる。西川地区は昔から勤勉なる気風があり、戸数は僅か三十戸余りだったが全体的に裕福で極貧者がなく富の格差も少なかった。地区の医者であった和田波治と千秋の父子が自宅を寺子屋にして地区の青少年を集め、和漢学、道徳礼儀を教え、勉強して家産の増殖を計ることを説いた。とくに千秋は博学多識で漢学者としても知られていて、門下からは、村会議員、初代村長、県議会議員、郡会議員等を歴任した高橋筒吉が輩出し、その他にも多くの人物が出てくる。此の山嶽社は、当初は珍珍社として県下の風潮に同調し、間もなく山嶽社に改め、明治十五年十一月十二日に県下の自由結社が地区の松山で巻狩大懇親会を開いた際には山嶽倶楽部となっていた。山嶽社は、部落の青少年だけでなく高橋筒吉らをはじめ郡会議員、村会議員や村長、助役収入役や教師ら村の有識者を網羅して社員となり発足後、十数年間は村の中心的な指導機関として役割を演じている。この間毎夜社員が社にあつまり勉強したり、新聞の回し読みして天下の大勢を討論したりした。社中の青年らは

「二に学問、一に道徳、二に富力、四に腕力、この四力を合わせ有するものは来れ、吾人の好敵手たらん」と、常に呼号して、まことに意気さかんであった。先に触れた、巻狩人懇親会は、高知市や土佐郡の外、西は高岡郡、東は香美郡などから、前夜の午後十時までに立志社に集まった者は数百名。鉄砲を肩にした者や、槍やなぎなたを小脇にかかえている者、野太刀を背に負った者、また毛布や兵糧袋などを支度した者達もいて、さながら革命軍が集結したような勢いで勇気りんりんとしていた。二隊に分かれて、一隊は法経堂を越え、二隊は二谷越えの道をとって進んだが、かざす松明の光りは、天を焦がすようなありさまで、翌日午前二時頃には東隊は西川洲和崎口に、西隊

は桑尾口に着き、野宿する。陽が登るとともに行動を起こし、かねての打ち合わせ通り森や土佐山の社員と共に山上からラッパを吹き鉄砲を連発し、掛声を上げながら狩り立てた。獲物は余り得られなかった様であるが、後松山の頂上に会員が集合し用意した懇親会で会食休憩し、高知に斡旋した。地元と森などの社員を合わすと参加者総勢は二十人にのほり、まことに、その時分無此の大快挙であった、とそのもようを伝えている。「自由は土佐の山間から」と板垣退助が言っているが、将にこれがそうではないかと思う。この山嶽社の元おこしとなった和田邸は、土佐山村立村百年記念事業として復元され平成三年に落成開放されている。(文化財保護委員長)

## 高知県の里山の野鳥

(一九八九年五月～一九九〇年五月)



田中正晴

### 一、はじめに

高知県の里山地域における鳥類の生息状況をjするために、鏡川流域でダム湖とその周辺に雑木林をもつ鏡村長崎を調査地に選び、一九八九年五月四日より一九九〇年五月五日の間、約一年間鳥類を調査した。調査地の鏡村は高知県の中央部

に位置する、県都の北隣の小さな山村である。地形は平坦地が極めて少なく一四度～一五度の急しゅん地帯である。林野の占める率は八三%にのほり、標高は二〇〇～八〇〇メートルで、全般的に高温多湿である。調査回数は一二回であったが好天候の中での調査であった。調査地域の環境の大別は鏡川流域で、鏡ダムによつ

て造られた人口湖が五〇%、林地四九%、耕地一%で占められている。都合により調査日時が不定期となつてしまったことを一言つけくわえておく。

この地域の調査では高知県鳥類生息調査報告書がある。注目される観察記録(田中)では、ノビタキ、九七八年四月九日、ルリビタキ、九八〇年二月、ノゴマ、九八五年一〇月二八日、クマタカ、九八七年一月二五日各一羽がある。

### 二、調査について

#### (1) 調査日時

調査は第一回を一九八九年五月四日におこない、一九九〇年五月五日までの計二三回行った。

#### (2) 調査地域

調査地域は鏡ダム北岸とその周辺である。調査ルートは図一に示すように県交バス停長崎分岐より、鏡ダム北岸を農道

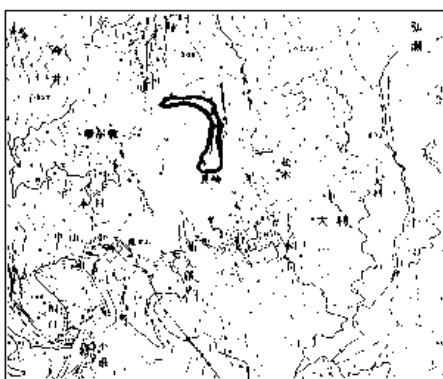


図1 調査ルート  
凡例—調査ルート

そいに周回するコースで、約一・五キロメートルである。

#### (3) 調査地の植生

林地はその全部がツブライイ、ウラジロカシなどの常緑広葉樹を主体とした広葉樹林で、一部竹林とスギ林が混ざっている。その他耕地は畑である。

#### (4) 調査方法

ラインセンサス法により、両側に出現した鳥の種類と個体数のすべてを記録した。歩行速度は時速約二キロメートルである。調査は同一条件下で行うように努力したが、天候や観察の難易などのために多少変動を生じた。またルートの都合上、調査地が重なるような場所があるので、記録の取り方には十分に注意を払った。鳥類の識別には七倍の双眼鏡を使用した。

#### (5) 調査のとりまとめ

調査結果は次のような方式によって分析資料を作成した。

出現率。出現個体数に関係なく、或る種の出現回数を調査回数で割った数値を百分率で表したものを出現率とした。

出現個体率。総出現個体数に或る種の出現個体数の割合を百分率で表したものを出現個体率とした。

優越度指数。出現回数は少ないが個体数が多い種もあれば、出現回数は多いが個体数が少ない種もある。そこでそのどちらが優越種となるかを知るために、或

表1 年間の鏡村鳥類生息調査集計表

種名	89														90														出現率	個体数	出現率	個体数	出現率	個体数
	5月4日 晴		5月14日 晴		5月21日 くもり		6月1日 晴		6月25日 くもり		7月22日 くもり		10月28日 晴		11月26日 晴		12月3日 晴		1月14日 晴		2月14日 くもり		3月10日 晴		5月5日 くもり									
	午前 9:30 60	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数	出現 個体数							
コウソウバト	1	2.7	1	1.3	1	2.3	3	4.6	1	1.3	1	1.7			1	0.7			1	0.7	1	0.8			1	2.4	76.9	12	1.0	0.8				
ゴイサギ			2	2.7																								7.7	2	0.2	3.0			
コササギ	1	2.7			1	2.3	2	3.1																				23.1	4	0.3	0.1			
アオサギ															1	0.7												7.7	1	0.1	0.0			
オシドリ													47	42.3	10	6.5	13	9.7	30	20.1	8	6.3	10	7.0			46.2	128	8.7	4.5				
ツガモ													19	17.1	16	11.7	58	43.3	45	30.2	53	42.1	39	27.5			46.2	290	23.9	11.0				
カルガモ															2	1.3							53	37.3			1.4	5.6	1.5	0.7				
コガモ															2	1.3	11	8.2									1.4	5.6	1.5	0.7				
トビ	2	5.4			1	2.3	1	1.5	1	1.3	1	1.7	1	0.9	1	0.7	2	1.5	2	1.3			1	0.7	1	2.4	84.6	14	1.2	1.0				
ノスリ																			1	0.7								15.4	2	0.2	0.0			
サシバ	2	5.4																										7.7	2	0.2	0.0			
ジョウビト	2	5.4	4	5.3	1	2.3	1	1.5	2	2.6	2	3.3					1	0.7	5	3.4	1	0.8		2	4.9	76.9	21	1.7	1.3					
キジバト	1	2.7	7	9.3	3	6.8	9	13.8	3	3.9	5	8.3	4	3.6	8	5.2	3	2.2	4	2.7	7	5.6	2	1.4	3	7.3	100.0	59	4.9	4.9				
アオバト																					9	7.1						7.7	9	0.7	0.1			
ホトトギス			1	1.3	1	2.3	1	1.5	2	2.6	2	3.3																28.5	7	0.6	0.2			
ヤマセミ	2	5.4																										7.7	2	0.2	0.0			
アリスイ																						1	0.8					7.7	1	0.1	0.0			
アオゲラ																						1	0.8	1	0.7	1	2.4	23.1	3	0.2	0.0			
コゲラ	1	2.7				2	3.1	3	3.9				1	0.9			2	1.5	7	4.7			1	0.7	1	2.4	61.5	18	1.5	0.9				
ツバメ			2	2.7	1	2.3	1	1.5	4	5.3	5	8.3																38.5	13	1.1	0.4			
キセキレイ																				1	0.7							7.7	1	0.1	0.0			
ヒヨドリ	4	10.8	10	13.3	8	18.2	12	18.5	13	17.1	9	15.0	13	11.7	7	4.6	7	5.2	8	5.4	6	1.8	2	1.4	7	17.3	100.0	100	8.7	8.7				
モズ								1	1.5			1	1.7	1	0.9	1	0.7	1	0.7			2	1.6					16.2	1	0.6	0.3			
ジョウビタビ													4	3.6	3	2.0	1	0.7					1	0.7				30.8	4	0.7	0.2			
シロハラ															1	0.7			3	2.0	2	1.6					2.4	6	0.5	0.1				
ツグミ															1	0.7	1	0.7	2	1.3	2	1.6					30.8	6	0.5	0.2				
アブサメ	1	2.7	2	2.7																								15.4	3	0.2	0.0			
ウグイス	4	10.8	12	16.0	8	18.2	12	18.5	8	16.5	6	10.0	5	4.5	3	2.0	6	4.5	4	2.7	1	0.8	10	7.0	7	17.0	100.0	96	7.7	7.1				
センダイムシクシ																										1	2.4	7.7	1	0.1	0.0			
コサノビタビ																										1	2.4	7.7	1	0.1	0.0			
エナガ	4	10.8	13	17.3	1	2.3	1	1.5				4	3.6	1	0.7	10	7.5	4	2.7	10	7.9	4	2.8	1	2.4	84.6	53	4.4	3.7					
ヤマガラス	1	2.7	2	2.7	1	2.3	1	1.5	6	7.9	1	1.7	2	1.8	3	2.6	1	0.7	1	0.7	1	0.8	1	0.7	1	2.4	100.0	22	1.8	1.8				
シジュウカラ	3	8.1	6	8.0	2	4.5	2	3.1	2	2.6	4	6.7	1	0.9	1	0.7	3	2.2	2	1.3	1	0.8	5	3.5	3	7.3	100.0	35	2.9	2.9				
ノジロ	1	2.7	4	5.3	3	6.8	8	12.3	25	32.9	12	20.0	8	7.2	15	9.8	8	6.0	5	3.4	4	3.2	3	2.1	2	4.9	100.0	98	8.1	8.1				
ホオジロ	4	10.8	6	8.0	6	13.6	5	7.7	5	6.6	6	10.0			2	1.3	1	0.7	2	1.3	2	1.6	3	2.1	5	12.2	82.3	47	3.9	3.6				
ミヤマホオジロ																				14	9.4	5	4.0	3	2.1			23.1	22	1.8	0.1			
アオジ															3	2.6	3	2.2	6	4.4	3	2.4					30.8	15	1.2	0.4				
カワラヒロ					1	2.3									6	3.9					1	0.8					30.8	9	0.7	0.2				
スズメ							1	1.5																				7.7	1	0.1	0.0			
カケス															1	0.7	1	0.7					2	1.6				30.8	5	0.4	0.1			
ハンボウガラス	2	5.4	1	1.3	2	4.5	2	3.1			4	6.7	1	0.9	4	2.6			2	1.3	2	1.6	3	2.1			76.9	23	1.9	1.5				
ハシブトガラス											1	1.7															1	2.4	15.4	2	0.2	0.0		
種数合計	18		16		17		18		14		15		14		23		20		21		24		17		18			43						
個体数合計	37		75		44		65		76		60		111		153		134		149		126		142		41			1213						

類。 留鳥。同一地域に周年生息している種により鳥類をわけると次のようになる。 渡りにより鳥類をわけると次のようになる。 移動つまり渡りをするものが多い。 渡りにより鳥類をわけると次のようになる。 留鳥。同一地域に周年生息している種

表3 年間の出現個体率の上位種

順位	種類	出現個体率
1	マガモ	23.9%
2	オシドリ	9.7%
3	ヒヨドリ	8.7%
4	メジロ	8.1%
5	ウグイス	7.1%

種の出現回数を調査回数で割ったものと、或る種の出現個体数を総出現個体数で割ったものを、掛け合わせて、〇〇倍したもの

表2 年間の出現率の集計表

順位	出現率	種類
1	100%	キシバト、ヒヨドリ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ
2	92.3%	ホオジロ
3	84.6%	トビ、エナガ
4	76.9%	カイツブリ、コジュケイ、ハシボソガラス
5	61.5%	コゲラ
6	46.2%	オシドリ、マガモ、モズ
7	38.5%	キジ、ホトトギス、ツバメ
8	30.8%	ジョウビタキ、ツグミ、アオジ、カワラヒワ、カケス
9	23.1%	コサギ、アオゲラ、シロハラ、ミヤマホオジロ
10	15.4%	カルガモ、コガモ、ノスリ、ヤブサメ、ハシブトガラス
11	7.7%	ゴイサギ、アオサギ、サシバ、アオバト、ヤマセミ、アリスイ、キセキレイ、センダイムシクイ、コサメビタキ、スズメ

表4 月日別渡りの区別による出現個体率

渡りの区別	5月4日		6月14日		5月21日		6月1日		6月25日		7月22日		10月28日	
	種類	出現個体率	種類	出現個体率	種類	出現個体率	種類	出現個体率	種類	出現個体率	種類	出現個体率	種類	出現個体率
留鳥	16種	91.8	13種	93.2	15種	95.6	16種	96.8	12種	91.9	13種	88.5	11種	36.9
	ヒヨドリ	10.8	エナガ	17.3	ヒヨドリ	18.2	ヒヨドリ	18.5	メジロ	32.9	メジロ	20.0	ヒヨドリ	11.7
	ウグイス	10.8	ウグイス	16.0	ウグイス	18.2	ウグイス	18.5	ヒヨドリ	17.1	ヒヨドリ	15.0	メジロ	7.2
	エナガ	10.8	ヒヨドリ	13.3	ホオジロ	13.6	キシバト	13.8	ウグイス	10.5	ウグイス	10.0	ウグイス	4.5
	ホオジロ	10.8	キシバト	9.3	ホオジロ	5.8	メジロ	12.3	ヤマガラ	7.9	ホオジロ	10.0	キシバト	3.6
	シジュウカラ	8.1	シジュウカラ	8.0	キシバト	6.8	ホオジロ	7.7	ホオジロ	6.6	キシバト	8.3	エナガ	3.6
	コジュケイ	5.4	メジロ	8.0	メジロ	6.8	カイツブリ	4.6	キシバト	3.9	シジュウカラ	6.7	ヤマガラ	1.8
	ヤマセミ	5.4	コジュケイ	5.3	シジュウカラ	4.5	コサギ	3.1	コゲラ	3.9	ハシボソガラス	6.7	トビ	0.9
	ハシボソガラス	5.4	メジロ	5.3	ハシボソガラス	4.5	コゲラ	3.1	コジュケイ	2.6	コジュケイ	3.3	コゲラ	0.9
	カイツブリ	2.7	ゴイサギ	2.7	カイツブリ	2.3	シジュウカラ	3.1	シジュウカラ	2.6	カイツブリ	1.7	モズ	0.9
	コサギ	2.7	ホオジロ	2.7	コサギ	2.3	ハシボソガラス	3.1	カイツブリ	1.3	トビ	1.7	シジュウカラ	0.9
	キシバト	2.7	ヤマガラ	2.7	トビ	2.3	トビ	1.5	トビ	1.3	モズ	1.7	ハシボソガラス	0.9
	コサギ	2.7	カイツブリ	1.3	コジュケイ	2.3	コジュケイ	1.5	キシバト	1.3	ヤマガラ	1.7		
	コサギ	2.7	ハシボソガラス	1.3	エナガ	2.3	モズ	1.5			ハシボソガラス	1.7		
	コサギ	2.7			ヤマガラ	2.3	エナガ	1.5						
	コサギ	2.7			カワラヒワ	2.3	ヤマガラ	1.5						
	コサギ	2.7					スズメ	1.5						
夏鳥	2種	8.1	3種	6.7	2種	4.0	2種	3.0	2種	8.0	2種	11.6		
	サシバ	5.4	ツバメ	2.7	ツバメ	2.7	ホトトギス	1.5	ツバメ	5.4	ツバメ	8.3		
	ヤブサメ	2.7	ヤブサメ	2.7	ホトトギス	1.3	ツバメ	1.5	ホトトギス	2.6	ホトトギス	3.3		
冬鳥													3種	63.0
													オシドリ	42.3
													マガモ	17.1
													シジュウカラ	3.6

渡りの区別	11月26日		12月3日		1月14日		2月14日		3月10日		5月5日	
	種類	出現個体率	種類	出現個体率	種類	出現個体率	種類	出現個体率	種類	出現個体率	種類	出現個体率
留鳥	16種	37.6	14種	34.8	15種	33.0	17種	40.6	13種	62.5	16種	96.1
	メジロ	9.8	エナガ	7.5	ヒヨドリ	5.4	エナガ	7.9	カルガモ	37.3	ヒヨドリ	17.7
	キシバト	5.2	メジロ	6.0	コゲラ	4.7	アオバト	7.1	ウグイス	7.0	ウグイス	17.7
	ヒヨドリ	4.6	メジロ	5.2	コジュケイ	3.4	キシバト	5.6	シジュウカラ	3.5	ホオジロ	12.2
	カワラヒワ	3.9	ウグイス	4.5	メジロ	3.4	ヒヨドリ	4.8	エナガ	2.8	キシバト	7.3
	ハシボソガラス	2.6	キシバト	2.2	キシバト	2.7	メジロ	3.2	メジロ	2.1	シジュウカラ	7.3
	ウグイス	2.0	シジュウカラ	2.2	ウグイス	2.7	モズ	1.6	ホオジロ	2.1	コジュケイ	4.9
	ヤマガラ	2.0	シジュウカラ	1.5	エナガ	2.7	ホオジロ	1.6	ハシボソガラス	2.1	キシバト	4.9
	カルガモ	1.3	コゲラ	1.5	トビ	1.3	カケス	1.6	キシバト	1.4	メジロ	4.9
	ホオジロ	1.3	ノスリ	0.7	シジュウカラ	1.3	ハシボソガラス	1.6	ヒヨドリ	1.4	カイツブリ	2.4
	カイツブリ	0.7	コジュケイ	0.7	ホオジロ	1.3	カイツブリ	0.7	トビ	0.7	トビ	2.4
	アオサギ	0.7	モズ	0.7	ハシボソガラス	1.3	ノスリ	0.7	アオゲラ	0.7	アオゲラ	2.4
	アトモ	0.7	ヤマガラ	0.7	カイツブリ	0.7	コジュケイ	0.7	コゲラ	0.7	コゲラ	2.4
	モズ	0.7	ホオジロ	0.7	オセキレイ	0.7	アオゲラ	0.7	ヤマガラ	0.7	エナガ	2.4
	エナガ	0.7	カケス	0.7	カケス	0.7	ウグイス	0.7			ヤマガラ	2.4
	シジュウカラ	0.7			カケス	0.7	ヤマガラ	0.7			カワラヒワ	2.4
	カケス	0.7					シジュウカラ	0.7			ハシボソガラス	2.4
	カケス	0.7					カワラヒワ	0.7				
夏鳥											2種	4.8
											センダイムシクイ	2.4
											コサメビタキ	2.4
冬鳥	7種	62.9	6種	64.8	6種	67.0	7種	58.8	4種	37.3		
	マガモ	49.7	マガモ	43.3	マガモ	30.2	マガモ	42.1	マガモ	27.5		
	オシドリ	6.5	オシドリ	9.7	オシドリ	20.1	オシドリ	6.3	オシドリ	7.0		
	ジョウビタキ	2.0	アオサギ	8.2	ミヤマホオジロ	9.4	ミヤマホオジロ	4.0	ミヤマホオジロ	2.1		
	アオジ	2.0	アオサギ	2.2	アオサギ	4.0	アオサギ	2.4	ジョウビタキ	0.7		
	コガモ	1.3	ジョウビタキ	0.7	シロハラ	2.0	シロハラ	1.6				
	シロハラ	0.7	ツグミ	0.7	ツグミ	1.3	ツグミ	1.6				
	ツグミ	0.7					アリスイ	0.8				



夏鳥。夏期に渡来して繁殖する種類。  
冬鳥。冬期に渡来して生息する種類。  
但し、本文での区分は四国地域で一般にいられているもので、調査地域に限定されるものではない。

### 三、調査結果

一九八九年五月から一九九〇年五月までの一三回調査を行った結果、表一に表すように四三種の鳥類が記録された。

出現率は表二に高い順からまとめてみた。ウグイス、メジロ、カラ類が一〇〇%の出現率であるのは、この地域が常緑広葉樹を主体とした広葉樹林であるためである。オシドリ、マガモが四六・二%の出現率であるのは冬期の間ダム湖に生息しつづけていたものであろう。これらの鳥類の生息環境に適しているものと思われる。

出現個体率は表二に高い順に五位まで表してみた。ここでは冬期に群で渡ってくるマガモ、オシドリが上位をしめていく。同じカモ類のコガモの飛来は少ない。また海ガモの飛来はなく、すべて陸ガモで占められていることは、内陸部の湖の特徴をよく表している。出現率の高かったヒヨドリ、メジロ、ウグイスは出現個体率も高い。ここでも広葉樹林帯の鳥類の生息状況を表している。

渡りの区分別による出現個体率の合計は留鳥五八・三%、夏鳥二二・三%、冬鳥

三九・五%である。月別では表四に渡りの区分別に高い順に表わした。

優越度指数は表五に高い順に五位まで表した。最上位はマガモである。次にヒヨドリ、メジロ、ウグイスと続いている。やはり内陸湖と広葉樹林のあるこの里山地域の特徴をよく表している。出現率一〇〇%であるヒヨドリ、メジロ、ウグイスはこの地域に周年生息し、繁殖している可能性も高い。

### 要約

高知県の里山地域における鳥類の調査を一九八九年五月から一九九〇年五月まで、調査地を鏡村長崎に選び行った。観察された鳥類は四三種であった。出現率の高い鳥類はキジバト、ヒヨドリ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロであった。

出現個体率の高い鳥類はマガモ、オシドリ、ヒヨドリ、メジロの順であった。

優越度指数の高い鳥類はマガモ、ヒヨドリ、メジロ、ウグイスの順であった。

### 文献

(1) 鏡村、一九

八一年、かがみ村要覧  
(2) 高知県環境保全課、一九八八年、

## 工石山の昔と今

山崎 清 憲

土佐山村の北辺にそびえる「工石山」は、地元や高知市のみならず、広く県民にとってもあこがれの山として、親しまれてきた。

高知市民にとつての山とは、五台山や鷲尾山、高の森などであるが、それぞれ標高の低い山であつて、言うなればハイキングに適した山であつたから、足の強い子どもや、若者達にとつては、魅力に欠け、北にそびえる高い山をめざすこととなる。高知市の北山の更に北方には、東から「国見山」「笹ヶ峰」「高尻木山」「三止山」「工石山」「雪光山」などが連なっているが、工石山はそれらの山の中でも、標高は一七六・八mと高い。

私達の若い頃、工石山に上がるには相当の「勇気」を要した。それは山の高さよりも、深い谷と巨岩、それにうっそうと茂る森林がかもしだす不気味さに加えて、アブローチが長く、時間のかかることであつた。梅干の入ったニギリ飯を腰にくくりつけ、朝早く家を出て北山を日

あとは駆け足で下山しても、帰りはいつも夜道であつた。

高知市からの出発集合地は、秦泉寺の金谷橋であり、椎野峠をめざした。この道は「七ッ淵」への参詣道であり、よく踏まれた道であつたが、今は東の「望六峠」越えの道が、参道の役目を果たしている。椎野峠からは、現在の北山スカイラインを北西に進み、土佐山村の「都網」を経て、「桑尾」に下り、高川川の左岸を進んで高川橋を渡ると、すぐに右の近道を上り、左上方の県道に出て、最奥の集落「城」に入る。ここは標高六百mのナロ地で、昔は十戸ほどの家屋があつた。人家のはずれに「右赤良木峠、左工石山」の道標が建つていた。当時は赤良木トンネルは無く、赤良木峠を越える道が土佐町に続いていた。道標に従つて右に上ると途中に「三宝山え」と刻まれた標石が建つていた。三宝山とは、土佐町石原の「高峰神社」のことであり、海難除けの神様として昔は、漁業関係の人達がこの峠を越えていったという。しかし今、赤

良木峠を越える道は途絶え、標石を尋ねるすべもない。

工石山への道は、登山道としてよく踏まれており、標高八百m地点の水場を過ぎて上がると、石段の基部に着く。この石段は、藩主山内一豊が「工石聖権現」に寄進したものと伝えられているので、かなり古い。この石段は心臓破りの石段で、きつい行、権現様への行、の道でもあるので、辛抱を強いられる。石段を上りきったところが「妙体石」であり、基部に権現の小社が建っている。信仰心のない者でも、ここに上るとなぜか自然に頭が下がる。それは、巨石への畏怖と神秘性が、そうさせるものかわからない。岩の高さは七十mほどで、垂直に立ち、オーバーハング気味で頂点を見ることができな。かつてはロッククライミングが行われた岩場であったが、今は利用されていない。登山道は妙体石の右をとおっており、岩場の急坂を過ぎると、支尾根を上る緩斜面の道となり、美しい林の中を抜けると頂上に着く。このコースは少しハードであるが、途中にはキャンプ場もあり、野性的な山道として登山者を喜ばせている。頂上から西に少し下ると校倉展望台があり、自然林の中を北の峰に向うコースがある。頂上から右に下ると「サイの川原」を経て、肩道を通りトンネル口に下っている。工石山の西には「つつじヶ森」



工石山、妙体岩でロッククライミング中の岳人（昭和49年）

に続く境界尾根道があり、東には「三辻山」が指呼の間に見え、標山峠の鞍部に続いている。

工石山は赤良木トンネルの貫通によって、高知市からの登山も楽になり、鉱山（下ロマイト）道を少し上って山道に入り、赤良木峠越えの旧道から左折すると「杖塚」の休憩所に着く。ここから右に北回りのコースがあり、左に進むと、妙体石の展望所「桧屏風岩」を経て、サイの川原を過ぎ頂上に至る。

かつては長距離登山を強いられた工石山も、道路が整備され、日帰りコースの山として多くの登山者を受け入れている。工石山は県下に数少ない自然林の残る山であり、自然観察に最適な山として、県民の森にも指定されている。

工石山は上佐山村の誇る盟峰と言える。

（高知県山岳連盟顧問）

## 土佐山村の植物

稲垣典年



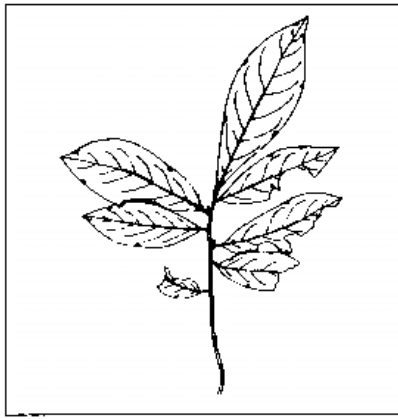
五台山から北山越に工石山を望む

鏡川の流域である上佐山村は高知市のすぐ北にあり「県民の森」である工石山を仰ぐ山村で、ほとんどスギ、ヒノキが植林され、天然林といえるのは、この工石山くらいしかのこっていません。

工石山は暖温帯のアカガシと冷温帯のブナが混生する推移帯として広く知られ、またホンシヤクナゲ、アケボノツツジの山として県民に知られていて、アカガシ、ブナ、ヒメシヤラ、ツガ、コ

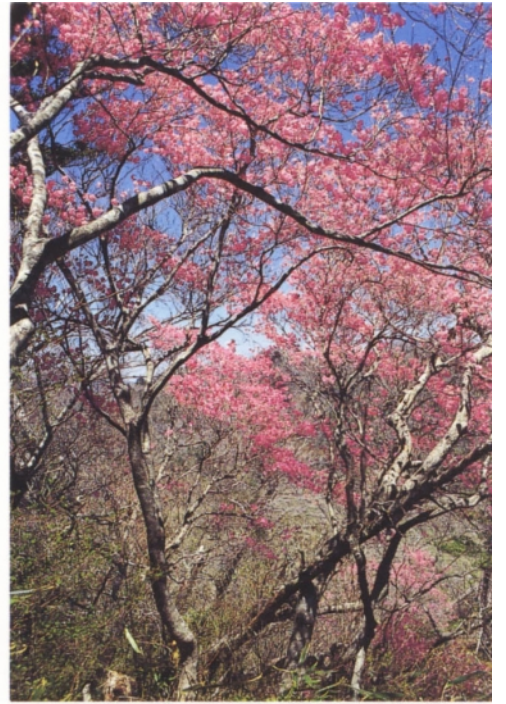
ハウチワカエデ、ハイノキ、イヌザクラ、タンナサワフタギ、シロモジ、クロモジ、タムシバ、ナンキンナナカマド、ツルシキミ、アサマリンドウ、ウラシマソウ、アオテンナンショウ、ホウチャクソウ、フタリシズカ、バイカオウレン、ヒメコウモリソウ、ミヤマクマワラビ、ヒカゲノカズラ、フジシダ、オオフジシダ、ジュウモンジシダ、オウレンシダ等が、尾根にはヒノキが多く、アケボノツツジ、アセビ、シロドウダン、ベニドウダン、ホンシヤクナゲ、トサノミツバツツジ、オンツツジ、ヤマツツジ等、ツツジ科の植物が目立ち、花のころは多くの人でぎわいます。こういった自然林はすくないだけに本当に大切にしたいものです。

鏡川ぞいの弘瀬から桑尾にかけては、石灰石が広く露出しており、特徴的な植生がみられます。ナンテン、ビワ、パイカアマチャ、イワシデ、コクサギ、シロバナハンショウズル、ヤハズマンネングサ、ムラサキオオハンゲ、ヒトリシズカ、メヤブソテツ、ナガバヤブソテツ、クロガネシダ、ツルデンダ、タチデンダ、ヤマブキといった好石灰植物といっている



こくさぎ型葉序の語源となった  
こくさぎ

ものや、アラカシ、アオキ、ニガキ、オ  
オツツラフジ、シロタモ、イヌビワ、ヤ  
ブコウジ、フユイチゴ、カノコユリ、シ  
マカンギク、シモバシラ、ユキモチソウ、  
シコクハタザオ、ハナミョウガ、ヤマア  
イ、ウナズキギボウシ、コアカツ、ケイ  
ピラン、イノモトソウ、ヤブソテツ、オ  
オバノイノモトソウ、マメズタや海苔の  
植物であるトベラ、コシヨウノキ、が見  
られるのもおもしろいところです。



アサボノツツジ

春から秋にかけ  
てのキシツツジや  
ユキモチソウ、ヒ  
トリシズカ、シロ  
バナハンショウズ  
ル、ヤマブキ、イ  
ブキシモツケ、カ  
ノコユリ、ウナズ  
キギボウシ、シマ  
カンギク、シモバ  
シラ等の花の咲く



(上) ユキモチソウ  
(下) シコクハタザオ

ころの散策はたのしいものです。  
山姥の滝（嗚呼の滝）は桑尾の古味よ  
り北へ数キロ行った谷あいには終点は  
駐車場となっており右手のヒノキの植林  
の中にゴトゴト石が祭られ目をひきます。  
滝の回りは二次林が広がっており、歩道  
も整備されい散策の場となっています。  
ケヤキ、イロハカエデ、ヤマザクラ、ヤ  
マビワ、リョウブと言った落葉高木や、

カゴノキ、ヤブニツケイ、アラカシ、カ  
ナメモチの常緑高木、ヤブムラサキ、ヤ  
マブキ、オンツツジ、アオキ、ヤブツバ  
キ、ヒサカキ、アセビ、アリドウシといっ  
た低木が見られます。草木ではジンジソ  
ウ、ウワバミソウ、ヨナメ、ヒキオコシ、  
ミズヒキ、ヌマダイコン、ハダカホウズ  
キ、エゴマ、カラスノゴマ、シマカンギ  
ク、ヤクシソウ、オトコエシ、イワタバ



山姥の滝

コ等が、シダ植物  
では、フモトシダ、  
カタヒバ、ゼンマ  
イ、シシガシラ、  
トウゲシバ、キジ  
ノオシダ、クルマ  
シダ、アマクサシ  
ダ、イワガネソウ、  
イワガネゼンマイ、  
ノコギリシダ、マ



シンジソウ

ルバベニシダ、ヤブソテツ、メヤブソテ  
ツ、トラノオシダ、ナチシダ、コバノカ  
ナワラビ、ヒメワラビ、オオバノイノモ  
トソウ、クリハラン、イワヘゴ、コバノ  
ヒノキシダ、ヤマイヌワラビ、ウラジロ、  
ホラシノブ、ミゾシダ、ヤマイタチシダ、  
ノキシノブ、イノデ、タチシノブ、シノ  
ブ、ホシダ、クマワラビ、マメズタ、イ  
ヌシダ、等が見られます。



シマカンギク  
谷間は東川部落

## 土佐山村の洞穴を訪ねて



川 澤 哲 夫

### 1、洞穴の民俗誌

土佐山村に人々が住み始めたのはいつ頃からで、どのような生活をしていただろうか？

古代の人々が生活していた証拠が、最もよく保存されているのは、石灰岩にできた洞穴で、これまで多くの人類学、考古学や古生物学の学者が洞穴の推植物に注目してきた。

土佐山村を西流している鏡川の両岸には、多くの石灰岩の洞穴があるが、著者は、昭和二十三年頃から、土佐山村の地下の世界に魅力を感じ、交通事情が必ずしも良くなかったこの地域の洞穴を、た

とくにナチンダは暖地生のシダで室内や足摺方面ではよく見かけますが、中央では昨年南国市で見つかったくらいです。今回、この山姥の滝でみつかったナチンダは土佐山村での新産ではないかと思われま。これからも採石のため多くの石灰岩や蛇紋岩地がなくなっていく今、のこり少ない自然林を大切にするとともに保護の方法も考えていかなくてはならないでしょう。

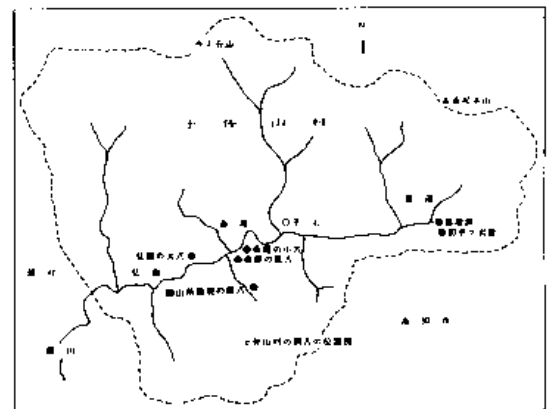
(牧野植物園技監)

びたび訪れて調査してきた。これまで行動を共にしてきた愛用のランプの足跡を、断片的であるが辿ってみることにする。

#### 初平ヶ岩屋(窟)遺跡

鏡川の源流になっている豊浦洞(穴)の、約三〇米上方の斜面に「初平ヶ岩屋」がある。以前に初平という人物が住んでいたの、村の人々はこの洞穴を「初平ヶ岩屋(窟)」と呼んでいる。

この洞穴は、昭和十五年頃に発見されていたが、昭和二十三年になって、当時丸の内高等学校の学生であった魚住政二と著者は、この洞穴からシジミガイやヤカリなどの貝殻を発見し、高知県史跡名勝



位置図

天然記念物調査員であった安岡源一(丸の内高等学校教諭)と発掘調査を行い、ハイガイ、鹿角などの自然遺物と土器の一部を発見した。その後、この洞穴は弥生中期の住居として、使用されていた洞穴遺跡であることが確認された。さらに下方にある豊浦洞は、入口から土器片が発見されたことから、初平ヶ岩屋に住む弥生人の水汲み場であったことを物語っている。この洞穴は、出土した遺物が少ないことから、ここに住んだ弥生人は、狩猟のための一時的な住居であったと考えられている。

#### 御山所権現の穴

「初平ヶ岩屋」の弥生人より、さらに古い人々の存在に思いを馳せるとき、標高の高い位置で、しかも生活するのに適当な洞穴の存在が注目される。土佐山村

都積に「御山所権現の穴」という古い信仰形態をもった洞穴がある。

洞穴に祭られている神は、石長比売命であるといわれている。この神のことに ついて、日本最古の歴史書である「古事記」には「——邇邇岐命が絶世の美人に出あって、誰の娘かと訪ねると、大山津見神の娘の木花之佐久夜毘売で、この姉に石長比売命がいますと答えた。大山津見神は、邇邇岐命にこの二人を奉ったが、醜い石長比売は送り返された。父の大山津見神は、娘二人を贈ったのは、石長比売との間に産まれたお子は、雨が降っても、風が吹いても石のように永久に栄えるようにと言う理由からであると、また木花久夜毘売を奉ったのは、木の花のようにはかないものとなるだろうと申された」と書いてあるが、まさしく石長比売とは、その名前から洞穴に祭るにふさわしい神格をもった神であると言える。このような古い言伝えをもつ洞穴は、古代の人々が生活していた可能性が非常に高い洞穴で、古くから多くの人々の信仰の対象とされている。

#### 弘瀬の大穴

鏡川右岸の石灰岩壁に大きく口を開いた洞穴である。洞穴の内部は平坦で、しかも天井も高く、住居にふさわしい広い空間をもっているが、これまで遺物が確認されていないのが不思議である。洞穴

は、石灰岩が採石され破壊がすすんでるので、ぜひ調査しておく必要がある。

### 「ほらあな」と言う名前

「ほらあな」は、洞窟、洞穴、岩屋、窟、穴など、さまざまな名称で呼ばれている。著者は、洞窟動物に「窟」の字を用いる。本稿では「洞穴」の字を使ったが、これが正しく、どれが誤りと言うことはない。

「穴」は、くぼんだ所の意味であるが、鎌倉時代の「吾妻鏡」には、仁田四郎忠常の人穴探検が、南北朝時代に成立した『神道集』には、甲賀二郎の人穴探検が書かれているが、いづれも「穴」の字が使われている。

「洞」は、うつろな穴の意味であるが、『古事記』に大國主命が草原で焼き討ちにあったとき、ネズミが「内者富良富良外者須夫須夫」と呼びかけたと書いてある。ほらほらとは、からっぽを意味する古い言葉であろう。

「窟」は、ほらあな、いわやの意味で、平安初期の歴史書『古語拾遺』に、「天石窟」の漢字が使われている。この窟の字を分解すれば、十人ノ窟となる。この語彙は屋根であることから、屋根のある住居を意味する。穴十屈ノ窟で、屈は折り曲げる意味から、古代の窟を利用した屈葬地を表している。

上佐山村の洞穴は、穴戸（菖蒲洞）、御山権現の穴、弘瀬の大穴など、穴と呼

ばれている洞穴が多く、また岩屋も窟と同義語で、人と関わりのある洞穴であることから、古代へのかぎりないロマンを誘う地域であると言える。愛用のランブとともに、再び訪れることのできる機会を楽しみにしている。

## 2、洞窟に棲む動物

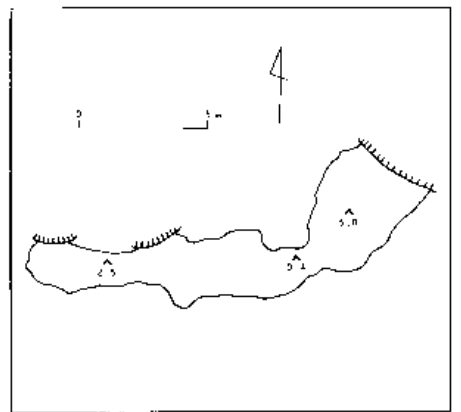
土佐山村は、高知市の北方の山合いに開けた静かな山村である。村のなかを流れている鏡川は、菖蒲洞を源流として西流し、さらに山々の水を集めながら、大きく蛇行して浦戸湾に注いでいる。

この鏡川の流域には、ほぼ東西に走る白木谷層群の石灰岩があつて、上流から初平ヶ岩屋、菖蒲洞（穴戸）、桑尾の風穴、桑尾の小穴、御山所権現の穴、弘瀬の大穴、白岩洞（鏡村）などの石灰洞窟がある。

洞窟のような暗黒の世界にも、その環境に生理的にも、形態的にも、特異な適応をせしめた、さまざまな動物が生息している。これらの動物を研究する学問を洞窟生物学という。

菖蒲洞や白岩洞には、これまでに多くの生物学者が次々に訪れて、そこに固有な洞窟動物を発見し、日本の洞窟生物学の発展に、貴重な研究材料を提供してきた。

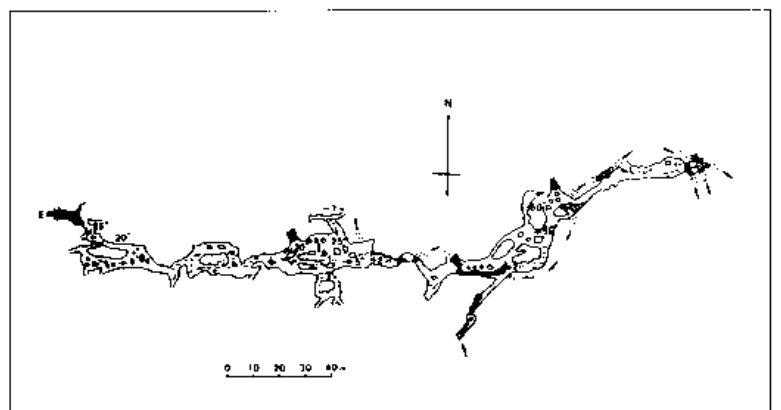
洞窟という地下の空間は、地上とちがうしく異なった特殊な環境を形成して



初平ヶ岩屋

いる。たとえば、日光が完全に欠除して、緑色植物が育たないため、洞窟に棲む動物は、地上から落ち込んでくる有機物や、コウモリの糞を栄養源としている。また洞窟内は、恒常的に気温が低く湿度が高いことが、そこに棲む動物の生理や生態に大きく影響している。コウモリのように季節的に洞窟を利用して移動する動物もいるが、一方、洞窟から外に出ることのできない動物は、その環境への適応から、皮膚が薄く体色が淡くなったり、眼が退化して無くなったり、触角やあしなどが細長くなっているものがある。これらの動物は、洞窟から地上に出て生活することができない動物で、これを真洞窟性動物と呼んでいる。このなかには、原始的な体の構造を残していて、一般に「生きていく化石動物」と呼ばれるものが多い。

上佐山村の石灰洞窟とそこに棲む洞窟動物は、これまでに約五〇種類が明らか



菖蒲洞

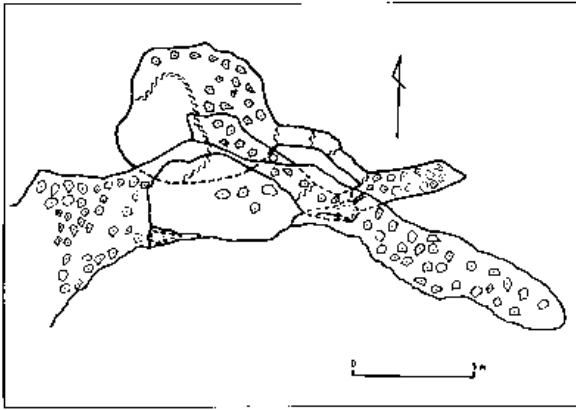
になっていくが、そのうち代表的な動物は次のとおりである。

### 初平ヶ岩屋

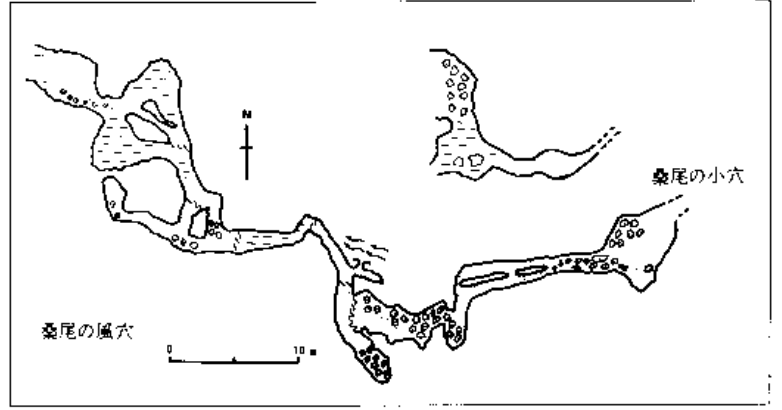
菖蒲洞の上方にある洞窟で、弥生時代の洞窟遺跡として知られているが、直接に外気の影響をうけるので、洞窟動物が生息できる環境でない。

### 菖蒲洞（穴戸）

洞口から地下水が流出し、鏡川の源流になっている。また一名を「穴戸」とも呼ばれ、古くから村の人々に知られていたが、さらに洞窟の奥が探検されてから「菖蒲洞」の名前で一般に知られるよう



御山所権現の穴



桑尾の風穴

になった。洞窟動物としては、ホラハシリダニ、メナシヒメグモ、ショウブアヤトビムシ、シヨウブオビヤステ、シヨウブツヤムネハネカクシ、ヤマモトメクラチビゴミムシなど知られている。これらの動物は、この洞窟を模式産地として発表された固有な種で、種名にシヨウブ(菅浦)の地名や発見者の名前がつけられている。

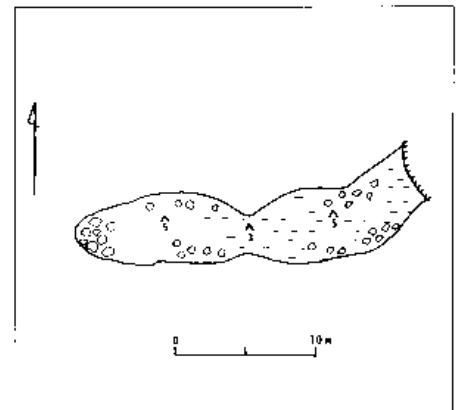
桑尾の風穴

鏡川左岸の川床近くにできた横穴で、洞窟の入口は小さいが、奥は地下流水があつて複雑な構造をしている。この洞窟に隣接して「桑尾の小穴」がある。

洞窟には、オビヤステの一種、クロイワヤステの一種やメクラチビゴミムシの一種などが発見されているが、まだ十分に研究されていない。

御山所権現の穴

「都網の縦穴」とも呼ばれ、古くから信仰の対象として知られていた。洞窟の内部は、上、中、下層の三層になつていて、中層の洞窟には、ホラヒメグモの一種、カワサワオビヤステ、ガロアムシの一種、ヤマモトメクラチビゴミムシ、ホラアナヒラタゴミムシなどが生息している。なかでもカワサワオビヤステはこの洞窟を模式産地として発表された固有種である。



弘瀬の大穴

弘瀬の大穴

洞窟は、鏡川右岸の石灰岩壁にできた横穴型の単純な洞窟である。入口が大きく、内部が乾燥しているため、洞窟動物が生息するには適していない。

遺跡洞窟として注目されるが、近年、石灰岩の採石のため破壊されている。

白岩洞(鏡村)

洞窟は、鏡川支流の古原川右岸の川床近くにある。洞窟動物に、カギオビヤステ、トサクロイワヤステ、ヒメチビシデムシ、ウオズミメクラチビゴミムシなどが発見されているが、近年、落石のため洞口が閉鎖され、入洞ができなくなっている。

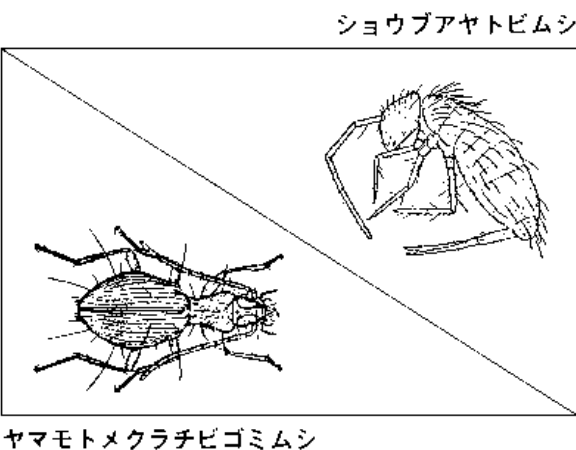
鏡川流域の洞窟から発見された洞窟動物は、貝類一種、くも類二種、ヤスデ類四種、むかで類四種、昆虫類二五種、哺乳類三種の約五〇種類が知られているが、なかでも、くも類のメナシヒメグモ、

ホラハシリダニ、ヤスデ類のカワサワオビヤステ、昆虫類のショウブアヤトビムシ、ヤマモトメクラチビゴミムシ、ウオズミメクラチビゴミムシなどが、この地域の石灰洞窟の固有な種類である。

一方、その他の洞窟動物は、四国の西部の洞窟でも発見されていることから、鏡川流域の洞窟動物相は、西系の動物分布域の東の端に位置づけられているのが特徴である。

このような洞窟動物相は、長い地史的な時間経過のなかで、現在の分布相に到達したものである。したがって、洞窟動物の環境への適応の程度とその分化の方向性は、この地域の地史の変遷と、洞窟動物の成因を物語っていると見える。

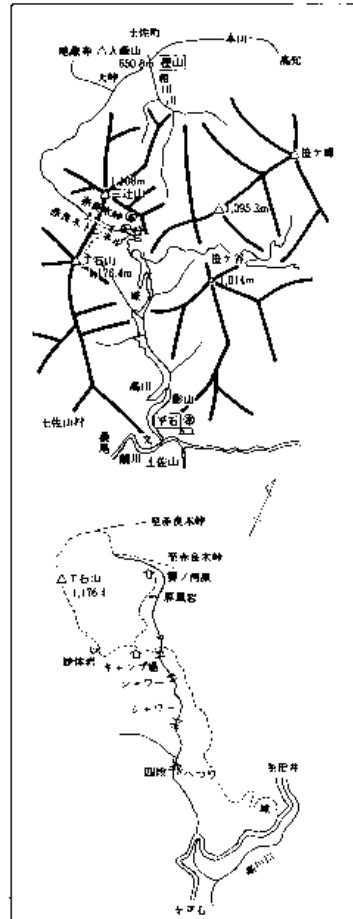
(日本洞窟学会会員)



ヤマモトメクラチビゴミムシ

# 工石山の登山と沢登り

国 沢 鎮 雄



ルート概念図

上佐山村にある工石山(二二七六m)は、古くから表工石山と呼ばれ、多くの人々に登山と沢登りが楽しまれている。工石山とその周辺は、自然休養林として、また県民の森としてしまわれている。高知市から県道一六号線を車で四〇分で、登山口の赤良木トンネル南口に到着する。ここには、青少年の家があり登山基地として利用されている。現在多くの人々に楽しまれていた登山コースと沢登りコースについて説明することにする。

## 赤良木トンネル南口―杖塚―屏風岩―サイの川原―工石山コース

### サイの川原―工石山コース

赤良木トンネル南口から登山道をゆっくり歩いて行くと、南北廻りコースの分



桧屏風岩から妙体岩を望む

岐点(杖塚)につく。ここより南廻りコースをとることになる。等高線を平行に歩いて行く。桧屏風岩までアケボノツツジ、ミツバノツツジなどを見ながらの三〇分の登りとなる。桧屏風岩の上からは、目の前に妙体岩の岩肌が光り、右手に工石山の頂上が見える。この桧屏風岩は、屏

風の形をした露石の上に桧が生育している。この名前がつけられた。

ここからサイの川原まではゆるやかな登りとなり、二〇分位で到着する。このサイの川原は工石沢の沢登りの終点であるとともに、高知市に流れている鏡川の源流の一つとなっている。ヒノキ、ヒカサギ、ミズゴケが生育し、サンショウウオがみられる。また、ホトトギス、ヤマガラ、メジロ、ウグイスなどの鳥の声を聞くことができる。サイの川原から頂上までの二・二kmの行程を三〇分位かけてゆっくり登る。工石山頂上でゆっくり休み下山となる。下山は同じ南廻りコースか、北廻りコースをとれば良い。

## 城工石山北廻り赤良木トンネル南口コース

### 南口コース

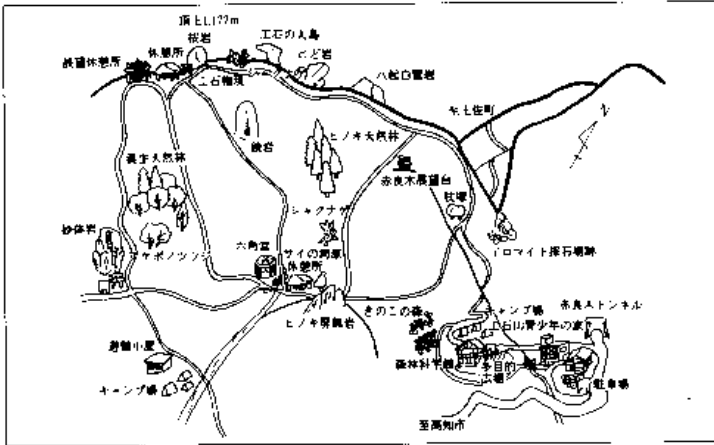
城からの登山は、昔からのコースでヒノキ、アカガシ、イヌツゲ、ヤマザクラ、ブナなど昭葉樹林、夏緑樹林の混生帯を見ながら妙体岩までゆっくり登って行く。妙体岩の下まで車道がつくられていて、ここまで車で頂上に登ることもできる。妙体岩の石段の下から右の道を通るとサイの川原にすることが出来る。妙体岩の下には、山岳信仰としての工石権現がまつられている。古生層のケイ岩の岩体は、かつては岩登りの練習場であった。妙体岩から四〇分位登って行くと工石山頂上に到着する。頂上展望台からは、北

西に石鏡山系、北東に白髪山(本山町)が見られる。この頂上二帯は、アケボノツツジ、ミツバノツツジ、ツクシシヤクナゲなどが生育し、四月―五月にかけての花見はすばらしいの一言につきる。頂上から北廻りコースで三kmの行程を下山することになる。頂上から二〇〇m位稜線上を歩くと、ドロマイト化石の岩体「桜岩」がある。ここより北の頂までは数分の歩きで良い。北の頂までは南北分岐点までのコース沿いには、工石の大鳥、白ワシ岩などの奇岩が見られる。また、昭和三八年の台風で倒木した二〇〇年生の風倒根は六×五・五m(二二・三m)もあり、天然木の大きさに驚く。南北分岐点から下山口まで楽しく歩くことになる。

## 工石沢の沢登りコース

沢登りは、水量の多いとき、少ないとき、それぞれ楽しさがあるが、初心者には危険であるので経験豊かな人と同行することが必要となる。

工石山の沢登りは、工石沢にかかっている白野橋からスタートする。沢の取りつきは、橋の右岸を二〇m登り沢におりて三〇分位登って行くと、二一四mの落差のある四つの滝の登りとなる。この滝の通過は、工石沢の難所となり、直登するか、この滝を巻いて登るか、リーダーの判断にかかっている。標高七〇〇m地



工石山県民の森案内図

点で沢の合流点にでる。ここより沢の右側を登って行く。うす暗い沢を通ると二つの滝があり通過すると二連の滝となり、シャワーをくぐりぬけることになる。いくつかの滝を登って行くと城からの登山道の直下にする。落差が大きいので右巻きで登山道にする。沢登りはここから明るく、眺望も良く楽しくなる。桧屏風岩の下を通過すると広い沢となり、やがて

## 工石山県民の森設定のいきさつ

桜井祥一

サイの川原にでる。沢登りはここで終わることになり、頂上までは登山道を歩くことになる。白野橋からサイの川原まで二時間三〇分の楽しい沢登りである。工石山の登山と沢登りに、数多くの人々が楽しんでいけるが沢登りは危険も伴い、充分な計画と経験豊かな人との同伴が必要であることを忘れてはならない。

(高知県山岳連盟会長)

工石山県民の森は、昭和四十二年に明治一〇〇年記念事業の一環として設定されました。これは同時に、国が進めていた国有林を国民のレクリエーションの場として開放する自然休養林計画のなかで、全国で最初に誕生した自然休養林でもありました。面積は九〇・四二ヘクタールで、その内訳は国有林部分が八一・八六ヘクタール、県が新たに購入した県有林八・五六ヘクタールとなっています。県民の森設定式は同年八月二四日現地で、当時の溝淵県知事、森尾営林局長をはじめ関係団体の代表ら百数十名が出席して行われました。工石山は大部分が国有林で、高知市近郊に残された唯一の天然林として、学術

上の貴重な存在となっています。森林の構成は大きく二つに分かれ、稜線や露岩地に見られるヒノキ型の森林では、高木にヒノキが多く、これにツガや亜高木・低木類のシヤクナゲ、アセビなどがまじっています。ほかの一つは、中腹から山頂にかけての斜面や沢沿いに見られるモミ型の森林で、暖帯性のアカガシ、ハイノキ、シキミなどと温帯性のブナが混生しています。工石山ではシヤクナゲにも特徴があり、普通は矮性で一メートルくらいの樹高ですが、ここでは四・五メートルもある直立型で非常にめずらしいといわれています。

動物では、春のウグイス、メジロ、ツツドリ、秋のツグミ、キツツキ、キジバトなど約一〇〇種類の野鳥のほか、サイの河原にはサンショウウオが生息しています。

このように工石山は四季を通じて私達を楽しませてくれる動植物に恵まれ、また頂上付近からは北に四国山地の山々が、南に高知市、香長平野をはじめ土佐湾が一望のもとに見渡せるなど、県民のレクリエーションの場としての条件を備えていました。高知市から車で一時間という近い距離にあることも、この地が県民の森に選ばれた要因となりました。

県民の森の施設は、設定後に順次整備を進めてきましたが、その主なものは国

有林部分が展望休憩所、便所、歩道、野鳥の巣箱、樹木の名札など、県有林部分が避難小屋、便所、チリ焼却炉、歩道、標識などです。また、昭和四六年度には県下で二番目の青少年の家が赤良木トンネル南側に整備され、一〇〇名収容の研究宿泊施設として利用されています。

現在は昭和六三年度と平成三年度の計画で「体験の森整備事業」を導入し、展望休憩所、便所、自然観察学習歩道、野営場、森林科学館などの整備を進めています。これらの施設は県民の皆様に工石山の自然や森林・林業についての知識・理解を深めてもらうことを目的としており、多くの方々に利用していただくことを願っています。なお、写真の森林科学館は来春オープン予定です。

(高知県林業課技師)



森林科学館